脇役が語る古写真資料「葵祭」から「葵橋」その1

当館では、数多くの古写真を所蔵しています。写し出された画像は絵画と違ってレンズがとらえた光景がすべて記録されます。

今回は黒川翠山（くろかわ すいざん）氏・石井行昌（いわい まさゆき）氏の撮影した「葵祭」の写真、中でも「路頭の儀」で葵橋を渡る行列の写真に注目して、それをとり囲む時代背景を 2 回にわけて読み解いてみたいと思います。今回は 1 回目です。

両氏の写真の撮影年は正確にわかってはいませんが、撮影された期間はおおよそ下記の期間と推定されています。

黒川翠山　氏	明治２７年（１８９４）頃～大正１２年（１９２３）頃
石井行昌　氏	明治３３年（１９００）頃～昭和１９年（１９４４）頃

ここで、葵橋の変遷を整理しておきたいと思います。これに関しては京都府京都土木事務所の HP 内鴨川真発見記第２６７号で詳しく紹介されています。

・大正７年　　現在の位置に「出町橋」完成

　〃　　「旧葵橋」流失

　〃　　「出町橋」を葵橋に名称変更

・昭和１０年　「葵橋（現在の出町橋）」流失

・昭和２９年　「葵橋（現在の出町橋）」再建

・昭和３９年　「新葵橋（現在の葵橋）」架設

　〃　　名称変更　「新葵橋」→「葵橋」、「葵橋（現在の出町橋）」→「出町橋」

この経過を元に両氏が撮影した写真を分析してみましょう。

「葵祭･路頭の儀」(石井行昌写真資料　No.676)

ここに写っている橋は、石井氏が撮影された期間が大正１２年頃までである事、以下の黒川氏の写真に写る新旧葵橋の様子を比べ合わせると、大正７年に流失した「葵橋」の様子であると推測できます。

「葵祭･路頭の儀」（黒川翠山撮影写真資料　No.1202）

＊旧葵橋

「葵祭･路頭の儀」（黒川翠山撮影写真資料 No.1185）

＊葵橋（出町橋）

最初に、この「葵橋」はどこに架かっていたのでしょうか。国土地理院 HP の正式地形図（大正元年）を見ると、葵橋が本満寺の敷地の南から北東に向けて架かっています。この位置を現在の葵橋の位置を重ね合わせてみると、ほぼ一致しています。

※出典：正式地形図（縮尺１／２０，０００）（大正元年）国土地理院

2 つ目に、写真をよくみると橋の手前に何本もの杭のようなものが建てられています。これは、上流から流れて来る流木などがダイレクトに衝突することを防いで、橋のダメージを弱める働きをしています。

ということは、葵橋上流西岸から東を望む場所から撮影されたものだと推測できます。それにしても川底が浅く、橋自体も随分低いものでした。

普段流れる水の量は現在に比べてとても少なかったようです。その理由は、やはり上流で農業用水を多く取り込んでいたことに加えて、現在のように住宅地は少なく空から降った雨も地面に浸透して地下水となっていたと考えられます。さらに、葵祭が開催されるのは、田植えシーズンとなる５月ですので、１年のうちでも最も農業用水が必要となる季節です。

3 つ目は祭の行列を観覧する観客の様子です。写真のとおり、橋の幅は狭く沿道のように橋の上では鑑賞できないので、近くの道路から見ています。しかし川に水がほとんど無いことや、橋脚が低く、舞台のように鑑賞できるため川の中まで観客が入ってきて、行列を鑑賞しています。

更に多くの観覧客が傘を開いています。洋風の傘「コウモリ傘」に混じって「番傘」がちらほら見えます。雨が降っているのでしょうか？むしろ晴天で、日傘として利用されていた様です。

同じ日に撮影されたと思われる別の写真をクローズアップしてみましょう。先程紹介しました、上流側を確認した「流木よけ」の杭の上に子どもが登って行列を覗き込んでいます。
いくら低い「葵橋」でも、子どもが観覧するには少々高かったようです。

「葵祭･路頭の儀」(石井行昌写真資料No.679)

（つづく）

（2018 年 4 月 2 日公開）